

マックス・フォン・ブランド (Max von Brandt) と ドイツの帝国主義

——帝国主義時代の一ドイツ人外交官のヨーロッパ文明論について——

リチャード・ジップル

I. 帝国主義時代とは

19世紀後半から第1次世界大戦までの期間はしばしば「帝国主義時代」と呼ばれる。この時代にはアメリカ合衆国とヨーロッパ列強、特にイギリス、フランス、ドイツ、ロシアは、植民地を獲得し、経済的・政治的な勢力範囲を広げるために激しく競争していた。もちろん、帝国主義というのは広い意味では、すなわち「隣国あるいは遠隔の地域に、軍事的・経済的勢力を拡大する国家活動」という意味では、古代・中世・近代、いつの時代にも見られた現象であるといえるが、20世紀に入ってから、マルクス・レーニン主義の影響でイデオロギー的な意味で使われるようになってきた。それは19世紀後半からの欧米資本主義列強の海外進出は資本主義の発展と深く結びついてきたからである。レーニンの考えによれば、19世紀末頃自由競争による資本主義の発展の結果、大資本が小資本を圧制して、商品生産の独占と銀行融資の集中化がどんどん進み、帝国主義列強は世界市場の再分割のために戦争が必然となったというのである。結局資本主義は自由競争段階から独占段階へ移行すると言う意味で、帝国主義は資本主義の最後段階となるのである¹⁾。

ともあれ、19世紀後半から第1次世界大戦までの「帝国主義時代」には、新しいエネルギー源の使用による生産性向上で、供給が需要を上回るようになり、この過剰生産の問題に対処するために海外に産業製品の販路、資本の投資先を求めるようになったという背景があった。ヨーロッパ人の注意は、人口も多くて、商業や工業、いわゆるインフラストラクチャーが未開発のまま投資の利益が高いと予想されていたアフリカとアジアの国、特に中国に向けられていた。日本も最初は、ヨーロッパの産業製品の販路や投資先の対象であったが、1880年代からその産業化が順調に進むと、かえって競争相手となったのである。

帝国主義時代の世界進出と植民地獲得の主な動機は自国の経済利益の追求や発展であったが、そのほかにも自国の人口増加問題・失業問題の解決²⁾、内政問題から海外の進出へ国民の注意をそらすこと³⁾、自国の名誉と威信の高揚、更にはヨーロッパの文明

を広げることも挙げられる⁴⁾。イギリスでは、“the White Man’s Burden”（白人の義務）、フランスでは“mission civilisatrice”（文明化の使命）、アメリカでは“Manifest Destiny”（明白なる運命）などの標語が用いられたことからわかるように、植民地においてヨーロッパの経済や政治の制度だけではなく、ヨーロッパの言葉、文化、教育制度、キリスト教などを広げようとする精神は、19世紀の帝国主義の支えとなっていた。これらの標語から伺えるもう一つのことは、19世紀のアメリカ及びヨーロッパでは文明とヨーロッパ文明を同一視しがちであった、ということである。啓蒙時代（17-18世紀）のモンテスキューやヴォルテールなどの思想家の考えでは、ヨーロッパ文明は他の文明と並ぶものとされていた。特に中国の古典文明に対しては憧れがあり、ヨーロッパの宗教、文化、社会などを批判しながら、中国の思想と社会を高く評価したこともあった。しかし19世紀になると、ヨーロッパの文化は他の地域の文化に優越しており、ヨーロッパ文明こそ文明そのものだとする傾向が強まった⁵⁾。

この論文では、一人のドイツ外交官を例に挙げ、帝国主義と文明との関係について考えてみたいと思う。すなわち、日本と中国で1860年から1893年まで33年もの長い間外交官を務めたMax von Brandt（1835-1920）の活動と著述を考察し、彼が帝国主義と文明についてどう考えていたかを見ていきたいと思う。

II. マックス・フォン・ブランドの帝国主義と文明の理解

A. ブランドの帝国主義の理解

ブランドの外交官としての経歴は、1859年から1862年にかけて中国、日本、及びタイとの通商条約の締結を委ねられたプロイセン極東探検隊に随行員として加わったことに遡る。いずれの国との条約締結にも成功した探検隊がベルリンに帰った後、ブランドは日本駐在プロイセン領事に任命され、1862年12月に再び日本に到着した。ドイツの政治的統一の結果、ブランドは1867年からは日本駐在北ドイツ連邦公使代弁、1871年からは日本駐在ドイツ帝国公使となった。ブランドのプロイセン及びドイツの外交官としての主な仕事は、日本との通商条約の枠内でドイツの経済的利益を積極的に主張し、擁護することであった。具体的には、日本政府に対して在日ドイツ人とその財産の保護、ドイツの商人への情報提供、日本政府によるドイツ人専門家採用への推薦などを行った⁶⁾。

1875年に、ブランドは中国駐在ドイツ帝国公使に任命され、1893年までその任にあって外交活動が続けた。途中からは外交団の古参者となり、中国政府に対してドイツだけでなく、列強全体の利害を代弁するようになった。ブランドは中国においても通商条約、特に最恵国条項を利用して、ドイツの商業の発展を図った。商人への情報提供も行い、汽船会社への助成金、銀行の創設、専門家の採用などの助言やドイツの

商人・宣教師の権利保護にも努力した。彼はビスマルクの基本的方針に従って経済的な利益に重点を置く政策を採ったが、中国やヨーロッパ列強に対してドイツの権利をより積極的に主張するため軍事力の増加を呼びかける、いわゆる「砲艦による外交」の主唱者でもあった。1890年からドイツはヴィルヘルム2世の親政による世界政策をとり、植民地獲得や中国における勢力拡大に力を入れたが、ブラントはドイツの経済発展を図り、中国における海軍・商業基地と経済的特権の獲得や、鉄道建設、鉱山業、中国政府への公債の発行や貸し付けなどを積極的に支持した⁷⁾。

ブラントは1893年にアメリカ人との結婚により退職しドイツに帰ったが、20世紀初めまでドイツ外務省の顧問として中国や東アジアの問題について様々な情報を提供し、多くの報告書を提出した。特に日清戦争のとき(1894～95年)ロシアとフランスと結んでいわゆる「3国干渉」へ参加することを積極的に勧めた⁸⁾。また、1897年のドイツ人宣教師殺害事件の際にはドイツの軍事介入を勧め、中国人知人との関係を通して海軍基地・商業基地のための膠州湾租借と山東省における鉱山、鉄道の特権についての交渉を助けた。そこでは中国との関係を悪化や他の列強による中国領土分割を刺激することなどを理由に、広大な領土を求めず、小規模の海軍・商業基地の租借で満足すべきであると力説した⁹⁾。同様に、1900年の義和団事件の際に報告を求められたときも、中国駐在ドイツ公使を殺した殺人犯の懲罰や賠償金などを中国政府に要求すべきであると主張しながら、過度の圧力は反発を引き起こす危険性があると忠告した¹⁰⁾。

今まで見てきたブラントの外交官・外務省顧問としての活動と報告書からわかるように、ブラントの第一の目的はドイツの経済的利益(商業、貿易、銀行業)の発展を図ることであった。ドイツの海外進出の対象となっていた日本や中国に対してだけではなく、競争相手であったイギリス、フランス、ロシア、アメリカなどの列強に対しても絶えずドイツの経済的利益を主張し、それを固めようとした。そのために、彼の具体的活動は条約の条件履行やドイツ産業、ドイツ軍やドイツ人の商人の優遇などとして現れた。同時にブラントは帝国主義時代の人間に普通であったように、ドイツの名誉や威信の高揚のために、日本や中国へのドイツ人専門家の派遣を奨励し、ドイツ人宣教師の活動を保護することも外交官の使命と考えていた。また、ドイツの利害を守るために武力の行使の必要性を認めつつ、中国人の反発や列強による中国分割への刺激を引き起こすような過度な措置はさけるべきであると警告した。要するにブラントはドイツに有利な立場の獲得と同時に日本・中国との条約の枠内、列強の勢力均衡の枠内で他の列強と協力していく必要性を強調したのである。

1893年にドイツに帰ったブラントは、書籍や雑誌・新聞記事の著作活動を始め、1914年までに本20冊、雑誌・新聞の記事175件を書き記した。その主なテーマは日清戦争・膠州湾租借、義和団事件、宣教師の問題、中国の歴史と文化、日本の歴史と文化、ドイツの外交政策・植民地政策、その他の国際関係の問題についてであった。その内容

の細かい分析に入る前に、先ずブラントの著作品で目立つ傾向について述べておきたい。先ず、彼がドイツの外交政策・植民地政策に関しては、対外強硬主義と好戦的愛国精神を避けて、比較的に穏健で、現実的な態度を取ったということである。たとえば、ドイツ海軍増強の必要性を認めながらも、英国を刺激すべきでないと考えていたし、ボーア戦争(1899-1902: 英国と南アフリカのツランスヴァール共和国、オレンジ自由国との戦争)の際も、反英国的なドイツの世論と違って英国の立場に理解を示した。また、ドイツ植民地開発のために英国の投資を歓迎した。ブラントの著作で目立つもう一つの点は、彼が中国の文化や歴史に興味をもって、理解や尊敬の態度を示したということである。ところが、中国に対する積極的な評価と対照的に日本へのそれは非常に消極的なものだった。さらに興味深いのは、ブラントには、特に中国文明との比較において、ヨーロッパ文明の優越を否定し、相対化する傾向があった。これらの点から、ブラントの文明の理解についてさらに詳しく考えてみたい。

B. ブラントの文明についての見解

① 中国文化への高い評価

上述したように、ブラントは中国の歴史・思想・文化を高く評価する傾向にあった。それは、中国文化が古くて、高い水準のものだからであり、具体的には現在の中国の社会的・道徳的・政治的な基礎が紀元前 1200 年に既に出来上がっていた¹¹⁾ 孔子の教えに基づいているからである¹²⁾。ブラントによると、孔子の思想は「高い水準の文明を達成する力を持っており、過去において中国の家族と国家を支え、また今でも支えているのである。」¹³⁾ このようにして、孔子の思想のような優れた思想体系を生み出したことは、中国文明の水準の高さと中国人の精神的優秀さの証拠になっているというのである¹⁴⁾。

またブラントは、世界史の流れの中で中国ほど隣国に精神的な影響を与えた国はないと考えていた¹⁵⁾。西洋の世界でキリスト教がヨーロッパの諸民族の教化、文明化に貢献したのと同様に、中国文明は東洋の世界でアジアの諸民族の文明化と教化の役割を果たしたのであり、チベット、ビルマ、シヤム、インドシナ、朝鮮、日本の文化は中国の道徳、倫理、思想、文字、政治的・社会的制度を導入し、発展したのである¹⁶⁾。また、ブラントは中国の文明がもたらしたものとして、活字・火薬・羅針盤・紙幣の発明を挙げた¹⁷⁾。

実際、ブラントは中国文明にはヨーロッパ文明よりも優れたところがあるとさえ考えていた。たとえば、中国人は古代から箸と食器を使っていたのに対して、ヨーロッパ人がナイフとフォーク、皿などの食器を使うようになったのは 17～18 世紀ごろからのことであると指摘している¹⁸⁾。彼はまた、中国の思想がキリスト教よりも寛容なことを賞賛している。キリスト教やイスラム教の歴史的発展と比べると中国の宗教の歴史

は比較的に平和的であったとブラントは主張した。つまり孔子の思想は、仏教や道教との争いの際にその信奉者を迫害したことがあったとしても、イスラム教やキリスト教のように数多くの犠牲者を出す殺伐としたものではなかったというのである。さらにブラントは、中国の古典の優れた道德観と倫理観を高く評価した¹⁹⁾。中国の古典は聖書よりも道德感が高いとさえ考えたブラントは、ある外交官に次のようなことを話したそうである。「中国人は私たちよりも高潔である。中国人の父親は若い娘と一緒に孔子の古典を顔を赤らめることなく読むことができるが、聖書についてはそんなことが言えない。」²⁰⁾

② 中国文化を理解しようとしなない宣教師への批判

この発言からわかるように、ブラントはヨーロッパの歴史、キリスト教の歴史を見れば、ヨーロッパの文明が絶対的に優越なものとは言えないと考えていた。これに関連して、ブラントは中国におけるキリスト教宣教についてもかなり批判的な考え方を持っていた。その背景には、中国で活動していたヨーロッパ人キリスト教宣教師のために、外交官として何回も中国政府に対して弁護しなければならなかったという経験があった。その回想録のなかに書かれているように、条約に関する列強の争いの問題は別として、宣教師の問題ほど彼と列強の外交官を悩ませた仕事はなかった²¹⁾。宣教師の問題については別の論文で細かく扱ったが²²⁾、ここでブラントのキリスト教宣教師への批判を簡単に紹介したいと思う。一つの批判は、多くの宣教師が中国の文化を理解しようとせず不用意に中国人の気持ちを傷つけ、排外主義的な反発を引き起こすということである。たとえば、1886年にある宣教師たちが重慶（チョンチン）の近くで建物を建てた時、住民が数人の外国人に怪我をさせ、建物を破壊するという事件が起きた。ブラントはベルリン外務省への報告書で、この事件の原因は、宣教師が「風水」という地気・地勢・陰陽五行・方位などを考え合せて住宅などの地を定める伝統的な術を無視し、住民を怒らせたことにあった、と述べた²³⁾。また、1891年にある宣教師が中国人の伝統的な祈りが不道德で、無益だと非難した看板を建て住民を怒らせた事件では、ブラントは中国政府に看板の排除を要求されている。ブラントはこの事件について、宣教師の感受性のない不注意が中国人の間に排外感情を引き起こしたもう一つの例である、と報告した²⁴⁾。

ところが、ブラントによると、宣教師たちにはその鈍感な態度よりもさらに大きな問題があった。それは、中国人改宗者が伝統的な行事で祖先の霊に敬意をあらわすことを、偶像崇拜だとして禁じたことであった。この習慣を禁じることは、代々の先祖を大事にする中国人の家族生活だけではなく、中国人の伝統的な価値観を非難することになる²⁵⁾。結局キリスト教信者になるということは、伝統的な家族関係と断絶することになる。宣教師の教えは中国社会を不安定にし、反外国感情を引き起こし

ている、とブラントは見ていた²⁶⁾。同様に、キリスト教宣教師と中国人知識人との衝突の原因には、キリスト教の影響が孔子の思想体系とそれが支えていた中国の家族、国家、いや中国文化そのものの基礎を破壊し、知識人の指導者としての地位を覆すことがあった、とブラントは考えた²⁷⁾。

③ 義和団事件対策への批判

中国文化への理解がブラントにとってどれほど大事なことであったかは、義和団事件や中国の近代化の問題についての彼の見解からも伺える。義和団事件でドイツ公使が殺害されたことを理由にして、ドイツ政府は中国に対して極めて強硬な姿勢をとり、犯人の死刑や中国政府からの賠償金と贖罪使節を要求したが、ブラントは外務省の報告書や新聞・雑誌の記事のなかで、外国人の殺害を厳しく罰せねばならないと認めながらも、中国人を公正に扱わなければならないことを力説した²⁸⁾。ブラントはまた、中国人には「ある点でヨーロッパの文化をしのぐ中国の古い文明を守る権利がある」とさえ主張したのである²⁹⁾。

義和団事件の要因の分析で、ブラントは中国人の立場にかなりの理解を示した。たとえば、義和団事件の要因の一つとして、中国人の文化や気持ちを理解せずに、西洋風の経済的・政治的改革の導入を急ぎすぎた点を指摘し、欧米人は中国人を野蛮人と考えがちで中国人はヨーロッパ文明とは異なる高度の文明を持っている民族であることを忘れてしまっていると述べた³⁰⁾。彼が義和団事件のもう一つの要因として挙げたのは、列強の膨張主義による過度の要求、特にヨーロッパの報道機関の無責任な発言であった。ブラントもチンタオの租借やドイツ企業のための鉱山業・鉄道建設の特権を主張したが、中国を分割し、列強の植民地にするというような過度な領土割譲や経済的優遇の要求は、中国の主権を侵すだけではなく、中国人を侮辱することになるので避けるべきだと考えた³¹⁾。ブラントによると、このようにして列強から圧迫されている中国人が自己防衛しなければならないと考えているのは当たり前のことであった³²⁾。要するに、ブラントの考えでは、義和団事件から学ぶべき教訓があるとすれば、中国人に西洋文明の導入を軍事力や外国的圧力で無理やりに強制することはできないということである³³⁾。

④ 日本文化への批判

興味深いことに、中国の文明と文化への高い評価と対照的に、ブラントの日本文化への評価は低い。たとえば、中国の歴史は長く、文明は高度であるのに対して、日本文化のほとんどは中国に由来するもので独自性に乏しいと見ていた。実は、日本独自の文化は余りにもレベルが低かったため、中国のもの（漢字、儒教の政治思想・倫理思想、政治体制・政府の組織など）を取り入れたのである³⁴⁾。同様に、もともと国力

が小さい日本は西洋の文化と制度を取り入れたため、今は世界大国となったのであるが³⁵⁾、あくまでもこの西洋文化の導入は表面的なものに過ぎないとブラントは考えていた。日本人は洋服を着ているが、これで生活の外面が変わっているだけだというのである³⁶⁾。日本の最近の発展、いわゆる「近代化」は、西洋文化の導入のおかげであって、もともとの伝統的な制度の上に立っているものではないからである³⁷⁾。また、ブラントによると、日本社会の中心は依然として個人ではなく、家族である。そのため、日本の近代化は外面的なものにとどまって、商人、農民、職人の日常生活は実際に変わっていないのである³⁸⁾。

ブラントはまた、日本の文化、社会のほかの面も批判した。当時のヨーロッパでは、日本の物品・美術などに関心が高まり、いわゆる日本ブーム(特にフランスで「japonisme」として知られていた芸術運動)が起きており、たとえば、武士道を高く評価していた人もいた。ブラントは、武士道の理想はよいかも知れないが、家臣が領主を頻繁に裏切るとは決して尊敬すべきではないと主張した³⁹⁾。これに関連して、欧米で日本通として知られていたラフカディオ・ハーン Lafcadio Hearn (小泉八雲) の日本観へのブラントの批判は非常に興味深い。ハーンによると、日本文化は本来優秀なものであったが、西洋の悪い影響を受けたため、だめになったというのだが、ブラントは、日本の封建体制時代にはヨーロッパと同様に裏切り、反逆、暗殺事件もあったし、しかもそうした時代はヨーロッパより長く(1870年まで)続いたと反駁し、昔の日本はそれほど良くなかったと主張した。たとえば、祭りの行事における男根崇拜、売春(ブラントによると、日本の女性人口の1%が売春婦であった)などが盛んであった等、日本人の道徳と家庭生活は1868年の明治維新まで世界の他の地域よりレベルが低かったものであり、日本人の道徳が最近良くなったのは西洋文化の導入のおかげに違いない、とブラントは力説した⁴⁰⁾。

⑤ 英国・米国の植民地政策への批判と評価

帝国主義時代の一つの特徴として、植民地獲得や海軍増強での利害衝突のため独英対立が高まっていたということが挙げられるが、ブラントは外交官としてイギリスの外交政策・植民地政策を狂信的愛国主義者の観点からではなく、割合に客観的な観点から見ていた。ブラントはイギリスの植民地政策を批判したこともあるが、その反面英国植民地政策にはドイツが見習うべきところもあると考えた。イギリス植民地政策の問題点はインドの植民地経営と行政改革の必要にあるとして、ブラントはインド人の政治参与を許さない方針、インド人の宗教や習慣への弾圧、重い税金の負担、厳しい警察体制を批判した⁴¹⁾。ちなみに、ブラントは、インドの生活の様々な面を生き生きと描き出す、大英帝国主義的な傾向が強かったイギリス人小説家・詩人のキプリング(Rudyard Kipling, 1865-1936)についての批評も書いたが、そのなかで、キプリン

グがイギリスの植民地行政制度を批判した風刺作品を高く評価した⁴²⁾。

しかし、ブラントはイギリスの外交・植民地政策を積極的に評価したこともあった。というのは、イギリスの植民地政策の中にはインドのためになったものもあったと考えたからである。具体的には、ブラントはイギリスの植民地支配がもたらしたものとして灌漑設備、道路、鉄道、教育制度、などの導入と充実を挙げた。彼の考えでは、このようなことはイギリスの植民地支配以外の政治体制では不可能だった⁴³⁾。

大英帝国の植民地支配への積極的な評価と著しく違って、アメリカ合衆国の世界進出、特にフィリピンの植民地政策についてのブラントの見解はかなり否定的であった。たとえば、ブラントは米国政府がかつてアメリカ原住民(インディアン)に対して行った迫害的な政策(殺害、土地の強奪、強制移動など)を厳しく批判し、米国のフィリピン支配について、もし同様な方針を実行すればフィリピン人はスペインの植民地支配を懐かしく思う時がくるだろう、と予想した。また、当時アメリカ西海岸で中国人排除主義の影響でアジア人移民制限運動が盛んになっているが、フィリピンで中国系の人を排除するような政策をとれば、大変な誤りになるとブラントは主張した⁴⁴⁾。

⑥ 文明化の義務

前にも述べたように、帝国主義時代の列強の世界進出を支えた動機としてアフリカ人やアジア人のような未開発な国の民族の文明化・教化の使命感というものがあった。この時代精神がどの様にブラントの見解の中に具現されているかは興味深い問題である。というのは、ブラントはアフリカやアジアの植民地での教化の義務を認めながら、今まで見てきたようにヨーロッパの文明やキリスト教が絶対的に優越なものであると考えていないからである。たとえば、ブラントはイギリスの植民地政策がインドにもたらしたものとして教育制度、灌漑設備、道路・鉄道網を挙げていたが、英国の植民地政策がこのように成功したのは、イギリス人が植民地支配者の現地人に対する責任をはっきりと意識しているからであるとブラントは考えた。すなわち、現地人の物質的生活、道徳的・精神的生活の向上に貢献する義務をはっきりと意識しているためだというのである。そして、ドイツはこの政策を見習うべきであるという結論もだしている⁴⁵⁾。同様の理由から、ブラントはキプリングについての批評記事の中で、19世紀末公にされたフィリピン人を教化するアメリカ合衆国の義務を主題とした *The White Man's Burden*⁴⁶⁾ という詩をキプリングの一番良いものとして高く評価した⁴⁷⁾。

一方、ブラントはドイツの植民地政策をかなり批判的な目で見つめていた。たとえば、ブラントは植民地経営組織の一つの課題は、植民地に流れてくる放浪者やその他の不良ヨーロッパ人から現地人を守ることであると考えており⁴⁸⁾、囚人の強制移民は現地人に悪影響を及ぼして、軍隊の駐留が必要になり、まともな植民地開拓者の邪魔

になるから避けるべきであると主張した⁴⁹⁾。ブラントによると、ドイツ領南西アフリカへの移民は量より質が大事であるので、良い社会階層の出身の人を引きつけるために政府は汽船・鉄道の助成金と税理上優遇措置、植民地開拓者の行政参与の許可を行うべきだと主張した⁵⁰⁾。

しかし、ブラントのドイツ植民地の現地人に対する評価が低かったことは否定できない。というのは、ブラントはアフリカ人への不正な扱いを批判する一方で、恩着せがましい調子でアフリカ人に文明の実りである政治的な権利を与えるべきではないと主張したからである。「現地人に権利を約束する前に、彼らに義務があることを知らせなければならない。先ず働くように教えねばならない。そして、働くことによって自由になれることを学ばせねばならない。」⁵¹⁾ また、植民地の労働力確保の方策として、ブラントはオランダ領東インドで行われていた強制栽培制度を導入すべきであると考えた。すなわち、現地民に農産物を強制的に栽培させ、安価に買い上げる政策で、現地民が怠け者であるから、労働を強制しなければならないというわけである⁵²⁾。

しかしその反面、ブラントは現地民を奴隷にしたり、政府や雇い主に依存させたりしてはいけないと見ていたことも確かである。このようなことは激しい憎悪を引き起こすことになり、白人の支配に対する抵抗を招くに違いないからである。そのため、植民地の発展は現地民を文明化することによってのみ成功するとブラントは主張した。同じ理由で、ブラントは現地人の権利（植民地経営と行政への参与）を認めなければならないという結論にまで達していたのである⁵³⁾。

この比較的寛大な考え方はまた、アフリカにおける宗教や教育に関するブラントの見解の中にも見られる。アフリカのドイツ植民地で活躍していたキリスト宣教師はイスラム教徒と衝突することが多かったが、ブラントに言わせれば、イスラム教の魅力はアフリカ人信徒をも平等に扱うことにあるので、植民地政府がいくらキリスト教を支持してもイスラム教の影響力を弱めることは難しいのである。ブラントの考えでは、イスラム教もアフリカ人を文明化する役割を果たすことができるのだから、帝国議会で政府の提出したイスラム教学校の補助金法案が否決されたことは残念なことだったのである⁵⁴⁾。

ブラントは欧米列強には植民地の現地民を文明化する義務があると意識していたが、中国の文化は高く評価しており、必ずしもヨーロッパ文明の優越を主張したわけではない。当時のヨーロッパ人が持っていた先入観の中には東洋人は人命を大事にしなさすぎるという見方があったが、ブラントは、アジアの国は人口密度が高く生活水準はヨーロッパほどではないのだから、ヨーロッパ人と異なる人生観をもっても仕方がないと考えた。そして、人命軽視の風潮を改めるためにはキリスト教の教えそのものを無理やりに押し付けるのではなく、病人や孤児の世話、教育活動などの実践的な福祉活動の方が生活向上にも実際に役に立つので優先すべきであると考えていた⁵⁵⁾。ブ

ラントによると、ヨーロッパの歴史（キリスト教の歴史を含めて）を省みれば、ヨーロッパ人が優越的な立場から非ヨーロッパの民族を蔑視し「東洋的残酷さ」を非難することなど決してできないはずである。アジア人の生活向上に貢献したいのならば、先ずアジアの情勢を勉強し理解した上で、漸進的な努力をしていかなければならないのである⁵⁶⁾。

⑦ 「黄禍」に関する見解

19世紀末ごろから20世紀初期まで流行っていた、もう一つの帝国主義的標語として「黄禍」というものが挙げられる。おびただしい人口を持つ黄色人種が白色人種とその文明を支配するだろう、という恐れから生じ欧米で流行したこの思想の背景には、日清戦争と日露戦争で勝利を収め軍事・経済大国となった日本の興隆や、ハワイや北米への中国人・日本人の大量移民があった。事実プラントは、日清戦争時に顧問として外務省に提出した報告書のなかで、日本が勝利した場合は国際情勢が大きく変わるだろうと書いた。具体的には、ヨーロッパ列強が中国を支持しない場合は、日本の方が勝つだろう。そして日本と中国が同盟できるなら、かつてモンゴル人やトルコ人がユーラシア大陸の大部分を統一し、その支配をヨーロッパの周辺にまで広げたと同じように、中国人と日本人はヨーロッパにとって危険になるというのだった。しかしプラントの考えでは、この危険は政治的・軍事的なものではなく、経済的な危険であった。特に、日本の工業化が進むと欧米列強が目指していた中国の市場を独占し、欧米を締め出す恐れがあると見ていた⁵⁷⁾。

ちなみに、ある学者によると、このプラントの報告はヴィルヘルム二世が画家クナックフス H. Knackfuss (1848-1915) にいわゆる「黄禍の図」を描かせたきっかけとなっているそうである⁵⁸⁾。しかし、プラントの報告書と著述からは彼が懸念していたのが中国・日本の同盟による政治的・軍事的支配ではなく経済的支配であったことがわかる。たとえば「黄禍」という雑誌の記事のなかで、プラントは「黄禍」が黄色人種によって組織された運動ではなく、世界中の民族のヨーロッパ支配への反発から生じた動きであると書いた。それは、中国、日本、フィリピン、インドシナ、インド、ペルシア、中近東、エジプト、アフリカ、欧米列強の植民地のどこにも見られる、植民地支配者への不満と反発から生じたものなのである。プラントによると、真の「黄禍」はヨーロッパ人が自分の文明の尊さを忘れて、エキゾチックな東洋の美術、文化、思想などに夢中になることである。民芸がいくら優れていても、表面的近代化がいくら進んでいても、ミルやスペンサーなどの思想を取り入れたとしても、ヒンドゥー教、仏教、神道の神々を信じ、一夫多妻の制度を持つ民族は、すべて文化の面では劣等であり尊敬すべきものではない⁵⁹⁾。要するに、日本などの国の文化を過大評価することによって文化の真の価値がわからなくなると、プラントは言わんとしているようである。

III. 結語

今まで見てきた事からわかるように、ブランドはドイツの世界進出を積極的に支持したという意味では帝国主義時代の代表的な存在であったと言える。しかし、ブランドは同時に中国の文明を特に高く評価し、ヨーロッパやキリスト教の歴史を振り返って見ればヨーロッパの文明が必ずしも絶対的なものとは言えないと考えていたことも事実である。また、植民地の現住民を教化する義務を強調し、中国やインド、アフリカ、フィリピンなどの植民地の現地人に対する列強の不正な政策を批判している。こういう意味では、ブランドはヨーロッパ文明を広げようという帝国主義時代の精神を意識しながらも、根本のところではヨーロッパ文明を絶対に優越的なものとする考えを採らず、かえって中国文明との比較によってそれを相対的なものとして考えていたと見るべきであろう。

* * *

(この論文は、1999年3月5日のヨーロッパ研究センター月例研究会で行われた発表に基づいたものである。)

註

- 1) レーニン著 堀江邑一訳『帝国主義論』東京：国民文庫社 1952 年を参照。
- 2) 「移住植民地主義」“emigrationist colonialism”については、Woodruff D. Smith, *The German Colonial Empire* (Chapel Hill: University of North Carolina, 1978), 3-4, 17-18 を参照。
- 3) Hans-Ulrich Wehler, *Bismarck und der Imperialismus* (Frankfurt a. M.: Suhrkamp, 1984) を参照。
- 4) 帝国主義の概念、理論については、Hans-Ulrich Wehler, (hrsg.), *Imperialismus* (Königstein: Athenaeum Verlag/Düsseldorf: Droste Verlag, 1979); Wolfgang J. Mommsen, *Imperialismustheorien*, 3. erweiterte Aufl. (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1987) を参照。
- 5) Pim den Boer, “Europe to 1914: The Making of an Idea,” in the *History of the Idea of Europe*, ed. by Kevin Wilson and Jan van der Dussen (London and New York: Routledge, 1993), 58-65.
- 6) Hans Schwalbe und Heinrich Seeman, (hrsg.) *Deutsche Botschafter in Japan 1860-73*. Mitteilungen der deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, 1974, Bd. 57a (Tokyo: Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, 1974), 20-21; Otto Schmiedel, *Die Deutschen in Japan* (Leipzig: K. F. Koehler, 1920), 41.
- 7) 中国駐在外交官としてのブランドの活動については、Richard F. Szimpl, *Max von Brandt and German Imperialism in East Asia in the Late Nineteenth Century* (PhD. Dissertation, University of Notre Dame, 1989) を参照。
- 8) [Memorandum] Max von Brandt, Berlin, Wiesbaden, 22 November, Politisches Archiv des Auswärtigen Amtes, Bonn (PAAA), China 20, Bd. 29; *Promemoria* Max von Brandt, Berlin,

- 8 April 1895, PAAA, China 20, Bd. 29; *Promemoria* Max von Brandt, Berlin, 9 April 1895, PAAA, China 20, Bd. 29. ブラントと日清戦争の問題については Richard F. Szimpl, “End of the Century Japan through German Eyes: Max von Brandt and Japan, 1894-1914,” *German History* 9 (1991), 310-317 を参照。
- 9) Privatbrief Max von Brandt Wiesbaden, 15. Februar 1898, PAAA, China 20, Nr. 1, secr., Bd. 37; [Memorandum] Max von Brandt, Berlin, 15. März 1899, PAAA, China 22, Bd. 2. 膠州湾租借の交渉については Szimpl, *Max von Brandt and German Imperialism in East Asia*, pp. 179-19 を参照。
- 10) Privatbrief Brandt an Bülow, Weimar, 19. Oktober 1900, PAAA, China 24, Bd. 1; Brandt an Richthofen, Weimar, 30. August, 1901, PAAA China 24. Bd. 1; Brandt an Holstein, 21 September 1900, PAAA, Nachlaß Holstein. ブラントと義和団事件については Richard F. Szimpl, “A German View of the Boxer Rebellion in China: Max von Brandt and German Interests in China at the turn of the Century,” 南山大学『アカデミア』第 58 号 1993 年 9 月, 47-76 を参照。
- 11) Max von Brandt, “China in ethischer, industrieller und politischer Beziehung. Zwei Vorträge gehalten in der Abteilung Berlin-Charlottenburg der Deutschen Kolonialgesellschaft 1898-1899,” *Verhandlungen der Abteilung Berlin-Charlottenburg der Deutschen Kolonialgesellschaft 1898/1898* 3 (1898/99), 53.
- 12) Max von Brandt, *Der Chinese in der Öffentlichkeit und der Familie wie er sich selbst sieht und schildert in 82 Zeichnungen nach chinesischen Originalen* (Berlin: D. Reimer, 1911), 3-4.
- 13) Max von Brandt, *Die chinesische Philosophie und der Staats-confucianismus* (Stuttgart: Strele und Moser, 1898), 96.
- 14) Max von Brandt, “China, Japan, Korea und die neueste Geschichte Ostasiens,” in [Helmholts] *Weltgeschichte*, 9 Bde., 2. Aufl., hrsg. von Arnim Tille (Leipzig und Vienna: Verlag des bibliographischen Instituts, 1913-1922), 1: 114.
- 15) Max von Brandt, “Die Grundlagen der chinesischen Kultur,” *Internationale Wochenschrift für Wissenschaft, Kunst und Technik* 2 (9 Mai 1908), 577.
- 16) Max von Brandt, “Das Reich der Mitte im Altertum,” in Friedrich von Hellwald, *Kulturgeschichte in ihrer natürlichen Entwicklung bis zur Gegenwart*, 4 Bde. 4. Aufl., hrsg. von Max von Brandt et al. (Leipzig: Verlag von P. Friesenhahn, 1896-1898), 1: 219.
- 17) *Ibid.*, 1: 214-215.
- 18) Max von Brandt, *Aus dem Lande des Zopfes. Plaudereien eines alten Chinesen* 2. Aufl. (Leipzig; G. Wigand, 1898), 23-26.
- 19) Max von Brandt, “Das Reich der Mitte,” 1: 229.
- 20) Ratibor an Bülow, Nr. 44 Weimar, 23 November 1909, PAAA, China 24, Bd. 80.
- 21) Max von Brandt, *Dreiunddreißig Jahre in Ost-Asien: Erinnerungen eines deutschen Diplomaten*, 3 Bde. (Leipzig: O. Wigand, 1901), 1: 46.
- 22) Richard F. Szimpl, “The Cross and the Flag: Christian Missions in Late Nineteenth-Century China from the Perspective of the German Diplomat Max von Brandt,” *Mission Studies*, Vol. XIV 1 & 2, 27 & 28, 1997, 175-202.
- 23) Brandt an Bismarck, Peking, 18 July 1886, Bundesarchiv Abteilung III, Potsdam

- (ehemaliges Zentrales Staatsarchiv der DDR) China 3, Bd. 3, Filmnummer 3064/38901.
- 24) Brandt an Caprivi, A. Nr. 156, Peking, 25 July 1891 PAAA, China 6, Bd. 18.
 - 25) Max von Brandt, *Dreiunddreißig Jahre in Ost-Asien: Erinnerungen eines deutschen Diplomaten*, 3 Bde. (Leipzig: O. Wigand, 1901), 3: 91.
 - 26) Max von Brandt, "Osiasische Probleme," *Deutsche Rundschau* 81 (November 1894), 262.
 - 27) Max von Brandt, "Die christlichen Missionen in China," *Die Umschau*, 1 (1897), 843-44.
 - 28) 外務省への報告については, Privatbrief Brandt an Bülow, Weimar, 19. Oktober 1900, PAAA, China 24, Bd. 1; Brandt an Richthofen, Weimar, 30. August, 1901, PAAA China 24, Bd. 1; Brandt an Holstein, 21 September 1900, PAAA, Nachlaß Holstein を参照。新聞・雑誌の記事については, 次者を参照。Max von Brandt, "Die chinesische Krisis," *Die Woche* 4 (3. November 1900), 1956; "Aus Süd und Ost," *Deutsche Rundschau* 105 (November 1900), 303; "Die Wirren in China," *Die Post* (29. Juli 1900); "Was man aus der Geschichte lernen konnte und sollte," *Deutsche Revue* 25, 3 (August 1900), 227; "Einkehr und Umkehr," *Finanzchronik* (1. September 1900).
 - 29) Max von Brandt, "Was man aus der Geschichte lernen könnte und sollte," *Deutsche Revue* 25, 3 (August 1900), 227.
 - 30) Max von Brandt, "Die chinesische Frage vom deutschen wirtschaftlichen Standpunkt aus," *Zeitschrift für Sozialwissenschaft* 3 (1900): 762.
 - 31) Max von Brandt, "Die Diplomatie der Großmächte und die Wirren in China," *Deutsche Revue* 25, 3 (Juli 1900), 103.
 - 32) Max von Brandt, "Die Boxer-revolution in China," *Neue Freie Presse* (10. Juni 1900); *Zeitfrage. Die Crisis in Südafrika, China, commerciales und politisches. Kolonialfragen* (Berlin: Gebrüder Paetel), 270.
 - 33) Max von Brandt, "Was man aus der Geschichte lernen könnte und sollte," *Deutsche Revue* 25, 3 (August 1900), 225.
 - 34) Max von Brandt, "Die Grundlagen der Japanischen Kulturentwicklung," *Internationale Wochenschrift für Wissenschaft Kunst und Technik* 2 (26 Dezember 1908), 1633.
 - 35) *Ibid.*, 1638.
 - 36) Max von Brandt, "Die Entwicklung Japans," *Zeitschrift für Sozialwissenschaft* 6 (1903), 91-93.
 - 37) Max von Brandt, "Das alte und das neue Japan," *Hochland* 1 (1904), 71.
 - 38) Max von Brandt, "China, Japan, Korea," 208-209.
 - 39) Max von Brandt, "Der Kampf um Ostasien," *Deutsche Rundschau*, 125 (Oktober 1905), 113-114.
 - 40) Max von Brandt, "Lafcadio Hearn. Volksglaube und Volkssitte in Japan," *Deutsche Rundschau*, 105 (Mai 1900), 70-72.
 - 41) Max von Brandt, "Das heutige Britisch-Indien," *Deutsche Rundschau* 99 (Juli 1899), 383-389.
 - 42) Max von Brandt, "Rudyard Kipling," *Deutsche Rundschau* 100 (Dezember 1899) 395-396.
 - 43) Max von Brandt, "Das heutige Britisch-Indien," *Deutsche Rundschau* 99 (Juli 1899), 362-391.

- 44) Max von Brandt, "Ex Oriente Lis," *Deutsche Revue* 24, 1 (März 1899) 362; "Das spanisch-amerikanische Konflikt," *Cosmopolis. Internationale Revue* 10 (Juni 1898), 839-840.
- 45) Max von Brandt, "Die englische Kolonialpolitik und Kolonialverwaltung," in *England in deutscher Beleuchtung*, hrsg. von Dr. Th. Lenschau (Halle, Gebauer-Schwetschke, 1907), 47-48.
- 46) *The Writings in Prose and Verse of Rudyard Kipling*, 1903. Vol. 21, *Five Nations* (New York: Charles' Scribner's Sons, 1903), 78-80.
- 47) Max von Brandt, *Fremde Früchte* (Stuttgart: Verlag von Strecker und Schroder, 1904), 95-96.
- 48) Max von Brandt, "Unsere Kolonien," *Deutsche Geographische Blätter* 17 (1894), 202.
- 49) Max von Brandt, *Kolonien und Flottenfrage* (Berlin, D. Reimer, 1898), 15.
- 50) Max von Brandt, "Was verstehen wir von Kolonien?" *Deutsche Revue* 30, 4 (Dezember 1905): 302-303.
- 51) Max von Brandt. "Unsere Kolonien," 200.
- 52) *Ibid.*, 200-201.
- 53) Max von Brandt, "Die Entwicklung der deutschen Kolonien," *Deutsche Rundschau* 147 (Mai 1911), 306.
- 54) *Ibid.*, 307.
- 55) Max von Brandt, "Orientalische Grausamkeit und was wir zur Abhilfe tun können" *Deutsche Revue* (Dezember 1909), 355-359.
- 56) *Ibid.*, 359.
- 57) Promemoria Max von Brandt, Berlin, 8 April 1895, PAAA, China 20, Bd. 29.
- 58) Heinz Gollwitzer, *Die Gelbe Gefahr. Geschichte eines Schlagwortes. Studien zum imperialistischen Denken* (Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, 1962), p. 210.
- 59) Max von Brandt, "Die Gelbe Gefahr," *Deutsche Revue* 36, 2 (April 1911), 63-64.